群馬ゐのはな会

鹿山　徳男

135周年記念によせて

私が入学したのは昭和25年である。終戦の虚脱から漸く立ち直りつつあった時である。

何んと言っても，あの東洋一と誇っていた亥鼻山頂の附属病院の堂々たる佇まいと，その色白い容貌を魁偉にまで遠慮会釈も無く変えてしまっている黒い迷彩の取り合わせ，しかし妙に，辺りと調和していた景観が一新入学生の視野にとび込んで来た印象を今でも忘れる事が出来ない。

当時の千葉医大を代表する教授の御一人は故中山恒明教授であった。それまで殆ど手つかずの領域であった食道癌の外科侵襲を成し遂げた人としてであったと考えている。新聞紙に頻回に取りあげられていた記憶があった。特に印象に残っていたのは当時の著名な風刺漫画家であった近藤日出造氏とのインタビュー記事を読んだ事があったが，この文を通して中山教授そして千葉医大，千葉が小生に印象づけられたものであった。

現在の最大関心事は母校135周年と「群馬ゐのはな会」との関係，関連の事である。一体何人の先輩の方々が千葉大を卒業されてから，この群馬で医業に携わられて来たのか殆んど明らかになっていない事である。古い記録が残っていないのである。多分同窓会としての組織が無かった為に，同窓会としての行事や集会があってもその都度都度の事として記録も残すことが無かった為と考えている。

私の妻の祖父須永仙次郎が千葉医学専門学校の明治41年（1908）の卒業である。卒後県外の病院を経て故郷の「みどり」市（旧大間々町）に内科医院を開業しているがこれは間違いない事である。

明治６年，当時の政府は全国医師の履歴調査を行った。その結果── 明治８年の内務省衛生局第１次年報── 医師数は23248人であり洋方医学を学んだ者は僅かに5097名（22％）に過ぎないことが明らかにされた。もしその素質を問題にすれば，おそらくその大部分はみじめなものであったであろうと史家は指摘しているのである。

明治医政のとりあげた第一は，洋方医師の養成を急ぐことであった。明治７年に発布された「医制」の中の「第12条」各大学区に医学校一所を置き病院を属す。と洋方医養成の方針を明示しているのである。

これは「ゐのはな」同窓会会員名簿の９頁に記載されている沿革図にある様に明治７年７月共立病院が最上段に乗っている事とよく一致するものである。

千葉の共立病院は明治15年７月県立千葉医学校を経て第一高等学校医学部医学科となり明治34年４月千葉医学専門学校医学科となったのは沿革図より明らかなことである。

須永仙次郎先生が卒業されたのは明治41年である。明治７年の「医制」発布以来34年を経過している訳であるが同窓会名簿より明治30年代から40年代にわたる卒業者数を見ると興味があり，明治政府の医師養成その意向が汲み取れる想いがするのである。

明治38年の卒業生数は	89名
39年	109名
40年	124名
41年	132名
42年	106名
43年	111名
44年	101名

はっきりと明治41年の卒業生数が最多でありその辺が明治政府の医師養成の思いがひと息ついた頃かなと，須永先生の事を通して感ずるのである。

その後の先生方の氏名動向がはっきりしないのである。しかし昭和18年卒業の佐藤進一先生のお力を借りて調査した範囲のお名前を記したいと思う。尚昭和13年以後については昭和22年卒の沖眞澄先生が御苦労の末に編集された「会員名簿」（平成15年４月１日現在）が千葉大学ゐのはな同窓会群馬県支部として発刊されている中に記載されている。それ以外には

五十嵐善次郎 先生（明治44年卒）
松山　信六 先生（大正11年卒）
中島　了介 先生（大正11年卒）
大屋　精一 先生（大正13年卒）
黒川　　潔 先生（大正13年卒）前橋日赤副院長
海宝　　仁 先生（大正14年卒）
山口　　茂 先生（大正14年卒）
内山　　信 先生（昭和７年卒）

矢端　秀男 先生（昭和９年卒）
駒井　繁雄 先生（昭和10年卒）
松澤　義之 先生（昭和29年卒）
柿澤利喜雄 先生（昭和５年卒）
衛生学教授（群大）
野中　俊郎 先生（昭和18年卒）
解剖学教授（群大）
黒住　一昌 先生（昭和24年卒）
解剖学教授（群大）
平尾　武久 先生（昭和24年卒）
生理学教授（群大）
島崎　　淳 先生（昭和29年卒）
泌尿学助教授（群大）
三浦　光彦 先生（昭和34年卒）
生理学教授（群大）
鈴木　　守 先生（昭和39年卒）
寄生虫学教授

以上の諸先生方が地域医療に又は研究教育の各分野で御活躍をされて大きな足跡を残されている訳である。

以下に会員名簿に記載されている同窓諸氏の名前を参考の為に年度順に記して見ます。

• 星野　久次（昭13）　• 北川　道安（昭15）
鈴木不二夫（昭15）　• 田中　敬明（昭16）
佐藤　進一（昭18）　橋本　五郎（昭18）
平形　義人（昭19）　宮下　隆二（昭20）
金井　朝忠（昭20）　大類十三雄（昭20専）
忰田　光一（昭20専）糸井　猛彦（昭22）
沖　　眞澄（昭22）　新井　邦男（昭23専）
榊原　孝夫（昭23専）斎川　俊一（昭23専）
三瓶　善康（昭23専）
• 黒住　一昌（昭24）　山田　寿雄（昭24）
• 斉藤　喜雄（昭24専）窪田　　敬（昭24）
林　　義次（昭24専）山口　隆久（昭25専）
井手　　實（昭25専）船曳　　甫（昭25専）
大和　舳舡（昭26）　• 大塚　　功（昭27）
石川　佳夫（昭28）　長谷川　透（昭29）
鹿山　徳男（昭29）　根本　幸一（昭29）
森田　　茂（昭30）　山本　輝通（昭30）
西村　忠雄（昭32）　小林　一三（昭34）
中田　益允（昭35）　黒岩　璋光（昭37）
鈴木　　守（昭39）　首村　紀夫（昭40）
鈴木　　弓（昭41）　本島　悌司（昭45）
多賀谷　茂（昭46）　竹内　英世（昭46）
山根　　治（昭48）　小林　道生（昭48）
保阪亜莉沙（昭48）　小林けい子（昭50）
小西　康二（昭53）　中島　　透（昭56）
川島　利彦（昭57）　田ヶ原　弦（昭58）
渋谷　　功（昭59）　五十嵐裕章（昭60）
斉藤　裕之（平元）　杉山　正和（平13）

以上平成15年作の名簿に加筆し21年８月現在の氏名である。• 印は逝去された方々である。

ここに記した御氏名は充分精査の上での事ではありませんので，これからも調査を行いより正確にして千葉大学と群馬県との関りを一層明らかにして行きたいと思う。

大学同窓会の在り方についてどの様な形のものがより良いものか，小生が卒業した昭和29年から30年代には同窓会などというものは殆んど頭のなかに無かった。現在でも多分教室のローテーションで地方の病院に行かれた諸氏はその都府県との関わりについて無関心の事であると思っている。同じ釜の飯を食った式の縁（えにし）を貴重に感ずるのには或る人生の経験，大脳の成熟が必要なことであると独断に判断している。全く初対面にしても同窓であると解った途端，気持ちの上での垣根が取り除かれることを何回も味わっているものである。「阿吽の呼吸」とも言うべき，このことが同窓会の心髄であると思う。

地方支部の充実，これを具現する様な各支部での会誌の発行，これは本部よりの補助金を得て確実なものとなり，当群馬支部でも，この事が推進力の一つとなっているのである。

本部と支部の関係は親子関係に例えるべきである。本部が総べてを統合すべきである。しかしその中味を明瞭してあたるべきである。それでもって支部の育成連絡網を確立すべきと愚考する。現在はうまくいっていると一支部長として思っている。

（かやま　とくお）